



【3】豊田佐助邸…豊田一族の拠点

1 大正時代の白壁地区

名古屋は、明治、大正と大きく成長し、三大都市の一角に食い込みました。その成長を支えたのは産業です。同時に経済界も活発になりました。

当時の名古屋経済界の動きは、城山三郎の「中京財界史」(文献①)に活写されています。その中では、土着派、近在派、外様派のグループが要り交って争っていたようです。近在派は名古屋の周辺から、外様派は県外等の人た

ちで、様々な人材が集まって名古屋の活気をつくっていました。そして、これらの外部からの人材が拠点にしたのが、比較的大きな土地が手に入る武家屋敷跡の白壁地区だったのです。

大正時代になって、そこに、新興勢力だった豊田佐吉の一族が入り込みました(図1)。今回は、この豊田一族の白壁地区の拠点化と、保存された豊田佐助邸をみてみたいと思います。

2 豊田佐助邸

(1) 豊田一族の拠点

発明王とされる豊田佐吉は、大政奉還の年、慶応3年(1867)、現在の静岡県湖西市で生まれました。21歳ごろから織機の動力化を志し、東京、豊橋等で工場化を試みていましたが、明治30年、名古屋の武平町に工場を開き、織機の製作と自動化に向けての研究を始めました。

そして、日々研究に没頭しましたが、問題は資金でした。佐吉の資金源が安定したのは、明治時代末、西区栄生町に新設した織布工場

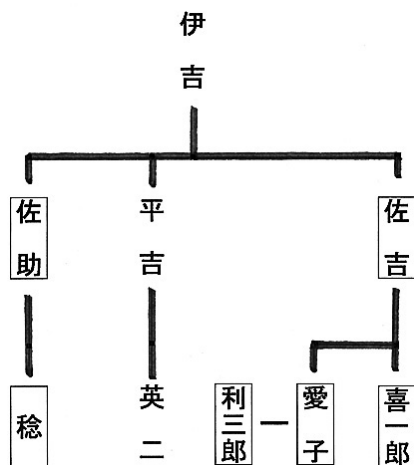


図1 豊田創成期の一族と白壁地区の居住者(□印)



図2 一族の居住場所
(名古屋市区住者全図・昭和8年：佐助邸揭示より)

を兼業した頃からです。その後、大正初めに専用の糸の必要から始めた紡織業が、第一次世界大戦の勃発による戦争景気で大成功をおさめ、大きな資金が得られるようになりました。

この頃から豊田一族は拠点を白壁地区に移したようです(図2)。佐吉邸は、少し西の長堀町ですが、いつ建設されたかははっきりしません。

年次が分かっているのは、大正4年に佐吉の娘と結婚した婿(養子)の豊田利三郎で、5年に近くの南外堀町から主税町の現在佐助邸とされる地に新築、移転したとされます。それが、佐助邸の洋館部分だと考えられています。しかし利三郎は、7年には一本北の白壁町筋にさらに広い土地を求めて移りました(現在、門と塀を保存)。その後、12年頃になりますが、佐吉の弟の佐助が洋館の隣に和館を増築して住むことになりました。以降、佐吉の長男、喜一郎も白壁町筋に居を定め、豊田一族は、白壁地区に集まることになったのです。

(2) 佐助邸

佐助邸については、昭和60年頃、町並み保存の関係で調査されています。その後も調査され、前述のように、大方の建設の状況が分かってきました(文献③)。それによると、建設は概ね2期に分かれており、前期は大正5年頃、利三郎が洋館等をつくった時です。後期は12年頃、佐助が和館等をつくった時になります。

前期は利三郎の新婚家庭ですが、目を引くのは、白い2階建ての洋館です。外観からはコンクリートに見えますがタイル張りの木造で、内部は、1階は洋間、2階は周辺を廊下として中に和室という和洋折衷です。台所などの生活空間は、その後ろ側にありました(今は取り壊されています)。この建物は、上が陸屋根になっており、豊田一族の子供達の遊び場になっていたようです。

後期は佐助による和館の増築ですが、佐助には5人の子供がいたために相当な空間が必要だったのででしょうか。この時、蔵も建設され、また和館の位置にあった古い建物は大改造され、奥に引き家されたようです。平成7年の改修時まで、明治建築とされる小さな2階建ての建物が残っていました。

(3) 保存の経緯

佐助邸は、昭和37年の佐助の死後、関係のアイシン精機に寄付され、社員寮として使用されていました。しかし、平成6年、居住者

がなく、老朽化して火事等の対策が難しいこともあって、建物の除却が決定したのです。そして、この連載の第1回で紹介したような経緯をたどり、名古屋시가、市政資料館の資料置場として一時的に借地することになりました。

その後、市は庁内で議論し、次のような整理をしました。

まず保存の理由は、

- ①大正期の和洋折衷の建築物である
- ②町並み保存地区の重要な建造物である
- ③名古屋の産業成長期の貴重な遺産である

としました。

また、利活用の方法については、

- ①観光関連施設(ミニ博物館など)
- ②市民利用施設(文化施設など)
- ③その他 災害関連の土地利用

等々、様々な議論をしました。

しかし、全市的な近代建築の保存活用の方が未定だったためもあって、利用方法をまとめるところまではいきませんでした。そこで今後の市の中長期的な課題とし、当面、借用を継続していくことになりました。契約は市とアイシン精機のどちらかの申し出がない限り継続し、建物は保存されることになっていたのです。

3 紀行 佐吉邸跡から佐助邸へ

… 大きな屋敷跡をあるく …

それでは、佐吉、利三郎、喜一郎と、豊田創成期の主要メンバーの居宅跡を探しつつ、保存された佐助邸を見学しましょう(図3)。

〈佐吉邸跡から〉

地下鉄の市役所駅の北改札を通り、2番出口を出て幹線道路を東に進みます。清水橋を

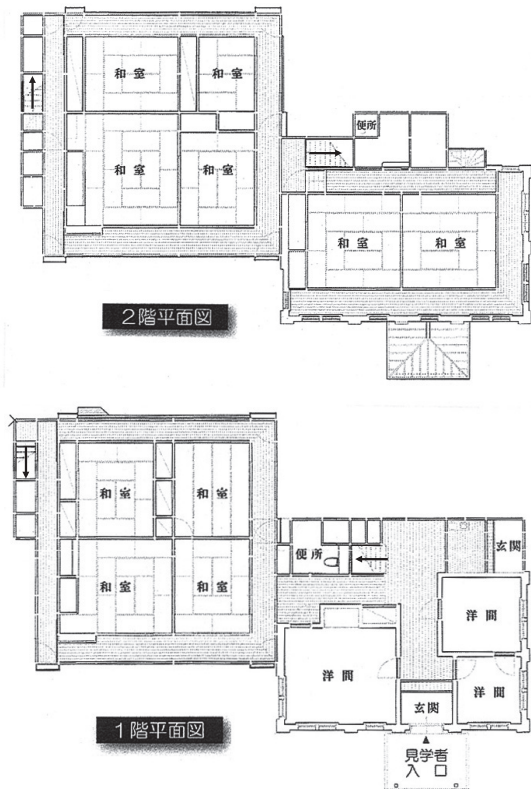


図3 旧豊田佐助邸建物平面図(佐助邸案内図より)

渡って道に沿って進むと、右側は拘留所、国の合同庁舎と続きます。その次のビルの建つ区画が豊田佐吉邸だった所です。残念ながら、今はなにも残りません。

まっすぐ進み、清水口の交差点を渡って右に、1本目を左に曲がると落ち着いた街並みの白壁町筋になります。少し行くと左手に大きな白いマンションがあります。この区画が



豊田佐吉(浅子)邸跡付近。幹線道路になった



豊田利三郎邸でした。市と協議して、黒い壁の塀と大きな門が保存されました。

そのまま進むと右側は料亭のか茂免です。その角を通り過ぎると左側は結婚式場になります。その東隣の区画が豊田喜一郎邸でした。今も大きなお屋敷になっています。

先ほどのか茂免の角まで引換して左へ曲がり、1本目を右に曲がると右側2軒目が保存された豊田佐助邸になります。

〈佐助邸を見る〉

佐助邸は、平成11年に一部改修し、公開



されました。門には、「旧豊田佐助邸」と表札があります。門からは、白い洋館が目に入ります。木造には見えません。

進むと玄関の手前左側に庭への入口があります。平坦な庭で、奥には池の岩組がありますが、とくに意匠を凝らしたという庭ではないようです。右に和館が見えます。

引き返して、今度は門の右側、洋館の横を進みます。奥はがらんとしていて、一番奥に土蔵が見えます。この空間には、7年の改修時点までは、洋館の勝手部分や、蔵の右には古い小さな洋館が建っていました。が、火災を考え、撤去せざるを得ませんでした。

玄関に戻り、建物に入ります。現在は東区のガイドボランティアの拠点になっており、案内をお願いできる日もあります。

入った左手は洋風のゆったりとした応接間です。天井には鶴亀の豊田のマークの換気口が目につきます。廊下に出て階段を上ります。





洋館の応接間。鶴亀のとよ田のマークの換気口がある



洋館の2階。

周囲を廊下にし、中に日本間がつくられている
広い緩やかな階段です。上って左に引き返すように段を上ると洋館の2階になります。周囲に廊下を廻らせた中に畳の和室です。大正初めの日常生活は和風だったのでしょう。襖絵の中に、ここにも豊田のマークが描かれています。北側の納戸の中に陸屋根への狭い階段がありますが、危険なため閉鎖されています。

段を下りて和館の2階を見ましょう。広い田の字の4部屋あります。奥の床の間には、平成7年に見つかった和館の棟札が展示されています。

1階に降りて、和館の1階部分を見ます。ここも2階と同じような田の字の4部屋です。洋館と和館を比べると、モダンで意気盛んな「利三郎」と、控えめで成熟した「佐助」という建築主の性格が見えるようです。佐助邸からの帰路は、門を右に出て、国道を左に行けば、10分ほどで地下鉄の高岳駅があります。



和館の2階。

田の字の和室。奥の床に、棟札が展示されている

4 トヨタの遺産

豊田はその後、自動車の会社になり、世界のトヨタとされる大企業に成長しました。そしてこの地方も自動車関連産業の一大拠点になりました。ということは、逆に見れば、白壁地区はそのルーツの一端を担っていることになります。

佐吉、佐助、利三郎、喜一郎とトヨタの創成期を担った人たちの拠点には、今日では、そのサクセスストーリーをたずねて人が訪れていると聞きました。

トヨタは、名古屋駅北の産業技術記念館に、その技術や生産の歴史を保存しました。しかし、大正時代の創成期の雰囲気伝えるには、それでは十分ではないように思えます。

「攻」と「守」。ここ佐助邸には、その先人の生活・文化の背景が伝わります。アイシン精機と名古屋市が手を組んで、長く守り続けてほしい施設になったことを喜びます。

〈主な参考文献〉

- ①城山三郎『創意に生きる—中京財界史』(1994、文春文庫)
- ②梶西光速『人物叢書 豊田佐吉』(1962、吉川弘文館)
- ③瀬口哲夫「豊田佐助邸の意匠と空間構成」(2000、名古屋市立大学芸術工学部編『芸術工学への誘い』)
- ④魚津社寺工務店・名古屋市まちづくり公社編「旧豊田佐助邸耐震工事報告書」(2015、名古屋市)